

(別記様式)

令和3年度 京都府立中丹支援学校 学校経営計画(スクールマネジメントプラン)(計画段階・**実施段階**)

学校経営方針(中期経営目標)	本年度学校経営の重点	本年度の成果と課題
<p>～展望する力・つながる力・挑戦する力～</p> <p>なりたい姿、なってほしい姿を展望し、子ども同士や教職員、家庭、地域、関係機関とつながりながら、将来の姿に向かって自分の力を精一杯発揮できるようにする。</p> <p>自立と社会参加、希望する進路の実現をめざし</p> <ul style="list-style-type: none"> ・命を大切にし、健康に生きる力を育てる。 ・コミュニケーションの力を高め、社会性を育てる。 ・学力を育てる。 <p>本校の「つきたい力表」に基づき、教育目標の達成に向けて指導計画を具体化する。さらに実効的かつ充実した「つきたい力表」となるよう、検証を進める。</p> <p>「つきたい力」6つの柱</p> <ul style="list-style-type: none"> ・基本的な生活習慣 ・健康に生きる ・伝える・聞く ・人と関わる ・学ぶ・はたらく ・地域で暮らす 	<p>1 危機管理意識をもった学校・学部・学級運営に努める。</p> <ol style="list-style-type: none"> (1) 緊急時対応訓練や研修会を実施し、教職員の危機管理意識を高める。 (2) ヒヤリハット等の事象を共有し、事故・けが等の未然防止に努める。 (3) 医療的ケア、アレルギー対応等の研修等を通して、子どもが安心・安全に学校生活を送ることができるようにする。 (4) 新型コロナ等感染症対策を教職員で共有し、必要に応じた対応により感染拡大を防ぐ。 <p>2 新学習指導要領及び京都府教育振興プランに基づく教育課程の運用及び授業改善、児童生徒の自己肯定感の育成に努める。</p> <ol style="list-style-type: none"> (1) 研究推進会議が中核となり、教務部と研究部と情報教育部が連動して実施にあたる。 (2) つきたい力を基に児童生徒の目標を明確化して個別の指導計画を作成する。 (3) ICT機器を効果的に活用する。 (4) 研究活動を通して、カリキュラムマネジメントの視点で授業改善を図る。 (5) 地域資源を活用し、地域とのつながりを意識した学校としての取組を推進する。 (6) 高等部卒業後の生活を見据えた学習を展開し、希望進路の実現に努める。 <p>3 地域の特別支援教育の専門性の向上に努める。</p> <ol style="list-style-type: none"> (1) 綾部・福知山地域の小中高等学校の特別支援教育におけるニーズの把握と期待に応える。 (2) 医療専門職派遣事業や校内外の研修を通して、専門性の向上に努める。 <p>4 働き方改革を推進する。</p> <ol style="list-style-type: none"> (1) 教職員の「働き方」に対する意識改善を啓発し、一人一人がやりがいをもって働ける職場環境を整備する。 (2) 京都府教育委員会の指針に沿って、業務改善の方策を実行し、総実勤務時間数の削減に努め、ワークライフバランスを整えて働くことができるようにする 	<p>【成果】</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 ・年間通して一人一人の職員が危機管理意識を持つよう研修に取り組んできた。アレルギー対応や緊急時の対応等、一定身についたと思われる。 ・新型コロナウイルス感染症に関しては、国や府からの通知の周知や、また本校における対応について共通理解を進めながら行ってきた。 2 ・各学部で授業研究会を重ねることで授業改善が進んだ。 ・GIGAスクール構想とも関わり、小・中学部においてもICT機器を効果的に用いた学習が増えた。 ・高等部における地域の方との門松づくりや、重度生徒が製作したケーキ皿を地域のケーキ店へ提供すること、中学部における校区の施設見学等、地域とのつながりを意識した取組をすすめることができた。 3 ・コロナ禍ではありながら、リモートを用いた研修を行うことにより様々な分野の専門家の話を聞くことができ専門性向上につながった。 ・地域のニーズに応じた相談活動を実施し、地域の支援力向上に寄与することができた。 4 働き方改革推進会議よりアンケートをとり、業務のどのようなところに多忙感を感じるのかを把握することができた。 <p>【課題】</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 「訓練のための訓練」になっている側面もあるので、今後はより臨場感ある訓練方法を検討していく。 2 単に授業の中でICT機器を用いるだけでなく、何のために用いるのか、用いることで児童生徒の学びがどう変わるのかを検証して用いるようにしていく。 3 教職員の多忙感の把握はできたが、それを解消する手立てまで講じることができなかった。

評価領域	重点目標	具体的方策	評価	成果と課題
小学部	危機管理意識の更なる向上と、児童の健康や安心安全の確保に努める。	新型コロナウイルス感染症対策として、「新しい生活様式」を指導し、その習得を図る。また、アレルギーのある児童やてんかん等の病気のある児童への対応について教職員間で共通理解を進める。	A	<p>○ 毎日の職員朝礼や学部会などの中で、「黙食」や「マスクの着用」などを呼び掛けたことで担任の意識が向上し、児童の指導につながった。また、医療や家庭などと連携し、アレルギーやてんかん等についての情報共有や共通理解も深まった。</p> <p>○ 研究部を中心にした授業研究等を学部として取り組む中で3観点に基づいた指導や評価の在り方に対する意識が高まった。</p> <p>▲ ICT機器活用についての実践や情報交流を活発に行う中で担任の意識が高まり、児童への指導につなげることができた。今後は、誰もがICT機器を更に効果的に使えるようにしていくことが課題となる。</p> <p>○ コロナ禍の中で地域資源の利活用ができにくい状況であったが、京特研授業改善部会の授業研究を該当学級だけでなく学部全体として関わったことで、担任の地域とつながろうという意識が高まった。今後は児童への指導へとつなげていきたい。</p> <p>○ オンラインやオンデマンドの研修会・研究会等の案内を回覧して紹介することで、担任の専門性向上の一助となった。引き続き専門性の向上や授業改善に向けた取組を続けていきたい。</p> <p>▲ 「分かって動ける」授業・環境づくりに取り組んできた。次年度は、さらに授業に対する「やってみよう」という意欲を高める指導を進めていきたい。</p> <p>▲ 作成書類を次年度は1つ減らすことができたが、今年度の小学部教員の超過勤務を減らすことはできなかった。</p>
	小中高一貫性のある教育を実現するために小学部段階でつきたい力、学部・学級で大切にしていることを明確にし、児童一人一人の力を最大限に伸ばすための指導に努める。	新学習指導要領に沿った教育課程の工夫・改善を図りながら、「育成を目指す資質・能力」の3観点(知・思・主)に基づいた指導及び評価の在り方を追究する。	B	
		ICT機器の効果的な活用ができるように、最新情報やお互いの実践を交流するなど、その研究・研修を更に進める。	A	
		キャリア教育の視点を個に応じて明確にし、学部の特色を生かして地域資源を利活用する取組を積極的に行い、児童が地域とつながろうとする意欲を高める指導を進める。	B	
	新学習指導要領を踏まえ、ねらいを明確にした授業づくりや授業改善、指導力及び専門性の向上に努める。また、教職員自身の健康保持にも努める。	研究授業を積極的に実施し、事後研や授業研究会、(オンライン等による)研究会参加を通して、さらなる専門性の向上と授業改善を図る。	B	
		すべての児童が主体的に活動できる「分かって動ける」授業・環境づくり、効果的な指導と適切な支援の在り方を研究・工夫して指導にあたる。	B	
		ワークライフバランスや総実勤務時間数を減らすことを意識しながら、計画的に業務に取り掛かる。	C	

評価領域	重点目標	具体的方策	評価		成果と課題
中学部	「つきたい力」と学習指導要領を踏まえた授業の創造・改善を推進する。	アセスメントを的確に行い、生徒一人一人の実態に応じた達成目標を設定する。	B	B	<ul style="list-style-type: none"> ○ 自立活動部等との連携を図り、生徒の実態に応じた目標設定や指導改善を進めることができた。 ○ 生徒同士の関わりを増やすためのグループ学習や個の実態に応じるための個別学習など、多様な学習集団や形態による指導を進めることができた。 ○ タブレット端末の積極的な活用を図り、生徒も指導者も日常的に使うことに慣れることができた。 ○ コロナ禍で限定的ではあったが、外部人材や地域資源の活用を図り、学習効果を高めることができた。 ▲ ICT機器の活用や取組の単元化によるねらいの明確化など、効果的な学習指導の工夫や教育課程の改善を一層進めていく必要がある。 ○ 必要に応じて教務部長や他学級の担任が指導支援に入るなど、学部全体をチームとした指導体制を敷くことができた。 ○ 日常的な保護者との情報共有を大切にし、学校での様子を伝えたり家庭の状況を把握したりすることができた。 ○ SC、SSW、関係機関との連携を図り、家庭支援を進めることができた。 ○ 学習や行事等の実施について、そのときの新型コロナウイルス感染症の感染状況に応じて柔軟に対応することができた。 ○ 研究活動を通して、生徒の実態と学習指導要領に基づくねらいの明確化を図るなど、根拠ある授業づくりについて研修を深めることができた。 ▲ 超過勤務の縮減に向けて、会議運営の工夫や設定時間の改善などを更に進める必要がある。
		ICT機器や地域資源の活用など、効果的な指導方法や適切な手立てを工夫して、生徒が興味・関心をもって主体的に学びに向かう授業を展開する。	A		
		学習指導要領等を踏まえた根拠ある実践や研究活動等を行い、得られた成果を教育課程の工夫や改善につなげる。	B		
	危機管理意識の向上と学部体制の確立を図り、生徒の安心安全の確保に努める。	危機を未然防止する視点を大切にし、様々な状況への対応を柔軟に考え、学級やグループ、学部で共通理解をして指導に当たる。	A	A	
		生徒全員を全ての指導者で指導する意識をもって効果的な指導体制を工夫するとともに、自立活動部や関係機関との連携を深め、安全の確保と指導の充実に努める。	A		
		日常的に保護者との連携を丁寧に行うとともに、問題行動や緊急時等には状況に応じた迅速で的確な対応をして、保護者との信頼関係を深める。	A		
		新型コロナウイルス等の感染症対策を学部内で共有し、感染防止対策を徹底しながら、ねらいを明確にした学習を進める。	A		
	教職員の専門性の向上を図るとともに、服務規律の徹底に努める。	研究活動への主体的な関わりや研修会等への積極的な参加を通して、特別支援教育に関する専門性の向上に努める。	A	B	
		働き方改革を推進する意識をもって業務を遂行するとともに、社会的規範を守って生徒の手本となる立ち居振る舞いをする。	B		

	重点目標	具体的方策	評価		成果と課題
高等部	新学習指導要領の趣旨を踏まえた教育を推進する。	一人一人の自立と社会参加を目指し、三つの柱で各教科等の育成すべき資質・能力を明確にし、教育活動を展開していく。	B	A	<p>▲ 個別の指導計画において、三つの柱を意識した目標設定をすることができたが、指導と評価の一体化には課題が残った。</p> <p>○ 学部研究会を通して、「どのように学ぶか」を考えるきっかけとなり、授業改善につながった。</p> <p>○ 生徒の姿から効果的なICTの活用について、学部で共有することができた。</p> <p>○ 感染対策をしながら取組を進めた。京しごと技能検定においては、校内検定(清掃・接客)や介護検定を本校で初めて実施し、生徒の自信につながった。</p> <p>▲ キャリアパスポートについて、効果的な活用事例等の共有については、今後の課題である。</p> <p>○ 感染対策に留意しながら、地域資源を活用した教育活動を進めることができた。</p> <p>○ コロナ禍で職場実習等、計画通りにできないこともあったが、進路部を中心とした臨機応変な対応で進路実現を目指して取り組むことができた。</p> <p>▲ 長引くコロナ禍による気の緩みが見られることがあった。意識を高くもち続ける方策を考える必要がある。</p> <p>○ 担任を中心とした未然指導ができた。また、事象については生徒指導部を中心にチームで対応することができた。</p> <p>▲ ハイチャレ等で他学級の生徒と関わる機会ができたが、全員で指導するまでには至っていない。</p> <p>○ 自立活動部と有機的につながりながら、授業改善が進んだ。</p> <p>○ 人権研修等で教職員の人権意識の高揚を図ることができた。</p> <p>▲ コンプライアンス研修は定期的を実施することができなかった。</p> <p>▲ 全体的に時間外労働を減らす意識は高まった。一方で、月80時間を超えている職員もいるため、より一層の注意喚起が必要である。</p>
		指導と評価の一体化を常に意識し、「主体的・対話的で深い学び」の視点から日常的な授業改善に努める。	A		
		主体的な学びや協働的な学びが実現できるように、授業でICTを積極的に活用するとともに効果的な活用方法について研究する。	A		
	将来の自分らしい生き方について考え、「働く」ことへの意欲を高める取組を進める。	「職場実習」「販売学習」「京しごと技能検定」等を充実させ、生徒一人一人のキャリア発達を促す。	A	A	
		キャリアパスポートを効果的に活用し、主体的に学びに向かう力を育み、自己実現につなげる。	B		
		地域と連携し、教育に必要な人材や資源を活用した授業を実施することで、地域社会の中で自分の役割を見つけたり、感謝されたりする喜びを味わう経験を積む。	A		
		関係機関と連携し、生徒一人一人に応じた就労支援を適切に行うことで希望進路の実現を目指す。	A		
	危機管理意識を高め、生徒の健康や安心安全の確保に努める。	新型コロナウイルス感染症の感染防止対策を徹底しながら、教育活動を進める。	B	B	
		未然防止の指導を行うとともに事象が発生した場合は、報告・連絡を迅速に行い、担任だけが抱え込むことのないようにチームで対応する。	A		
		全員の生徒を全ての指導者で指導する意識を持つとともに自立活動部や関係機関との連携を深める。	B		
	コンプライアンス意識の向上と徹底を図り、働きやすい環境作りに努める。	教職員の人権意識の高揚及び人権教育に関する実践力・指導力の向上を図り、多様性を認め合い、一人一人を大切に教育を行う。	A	B	
		学会等コンプライアンスハンドブックを活用した研修を定期的に行い、コンプライアンス意識の向上を図る。	B		
働きやすい環境作りに向けて、学部全員で創意工夫をして働き方改革を推進し、教員の心身の健康を守るとともに、教材研究や自己研鑽ができる時間を確保し、授業力の向上を図る。		B			

学校運営協議 会による評価	<ul style="list-style-type: none">・学校経営の重点、成果、課題等について・訓練等の在り方について・働き方改革の進め方について
次年度に 向けた改善の 方向性	<ul style="list-style-type: none">・児童生徒、保護者、教職員の誰が見てもすぐにわかる学校教育目標を設定する。・共生社会の形成ということを念頭に置き、学校経営を行う。・訓練、研修を重ねることで組織としての危機管理意識を高めていく。・働き方改革に関しては、本当に必要な業務に集中できる環境設定を行う。